

新年あけましておめでとうございます。皆様におかれましては、穏やかに希望に満ちた新年をお迎えになられたことと存じます。

旧年中は、教育・研究・医療・社会貢献の各分野において、多大なるご尽力を賜り、心より御礼申し上げます。

とりわけ、医学部附属病院のスタッフの皆様におかれましては、年末や年始に関わらず地域医療を支えてくださっていることに対しまして、深い感謝の意を表します。

これから始まる新しい令和8年も、皆様とともに歩みを進めていけることを、何より心強く、また大変ありがたく思っております。

多くの皆様に直接お話しできるせっかくの機会ですので、先ず始めに昨年一年を振り返りながら、お話ししたいと思います。

社会の動きに目を向けますと、昨年、国内では、宮崎県や青森県などで大きな地震が相次いだほか、異常気象による大規模な森林火災や豪雨災害などが各地で起こり、改めて自然の恐ろしさを思い知らされました。

また、本学におきましても火災や倒木が起き、防災対策の重要性を改めて認識させられた一年となりました。

国民生活においては、異常ともいえる物価高が続く中で、備蓄米の活用など、新たな暮らしを支える仕組みが注目されました。

このように社会の基盤を揺るがす課題に、多くの国民が直面する中ではありましたが、一方で、我が国から2名の国立大学に所属する研究者がノーベル賞を受賞し、日本の科学技術と研究力が世界から高く評価されていることを実感できる、誇らしい出来事もありました。

世界に目を向けますと、紛争など地政学的な不安定さが続くとともに、AIの急速な普及は、研究、教育、医療や業務の在り方そのものを大きく変えつつあります。

こうした変化を決して遠い出来事として捉えるのではなく、地域はもとより世界と向き合いながら、より良い未来の実現に向けた取り組みを、皆様と一緒に進めていきたいと考えております。

只今、申し上げた認識のもと、次に本学の取り組みについて振り返りたいと存じます。大学の根幹である教育においては、急速に変化する現代社会や、一層進むグローバル化

を見据えた学びの在り方を見直すため、本学では、全学共通教育改革をスタートさせ、クォーター制の導入や、課題解決型のPBL授業の強化などの取り組みを、懸命に進めてまいりました。

これからの時代においては、知識を身に付けることにとどまらず、自ら考え、他者と協働し、課題に向き合う力を養うことが不可欠であります。

学生の皆さんが、本学での学びを通じて、21世紀に求められる力を着実に身に付け、自信をもって社会で生き生きと活躍していけるような教育を、今後とも展開して参ります。

続いて、本学の重要な使命の一つである医療の分野に目を向けますと、医学部附属病院の関係者におかれては、厳しい経営環境のもと、外来機能強化棟の新築を延期しなければならない中であっても、地域医療の最後の砦として、日々多大なご尽力をいただいておりますこと、改めまして敬意を申し上げます。

皆様のご理解・ご協力のおかげで経営面に関しても改善に向かいつつあり、また、国からの予算に関しても、7年度の補正予算や8年度当初予算において運営費交付金の増額や附属病院の機能強化の経費が措置されるなど、少しずつではありますが、明るい兆しも見え始めております。

今後も皆さまのお力をいただきながら、私も木内病院長を筆頭とする医学域の皆様と共に、全力で経営改善に取り組み、外来機能強化棟の整備の再開など、病院機能を充実させていきたいと考えております。引き続き、ご協力のほどお願いいたします。

さて、こうした教育・医療を支える基盤として、研究力の強化も欠かせません。

ご承知の通り、本学は昨年1月に、文部科学省の日玉の取り組みである「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業（J-PEAKS）」に、難関を突破し採択されました。

甲府キャンパスのゼロミッションみらいラボ棟、医学部キャンパスのニューロングリア・クロストークセンター山梨は、この事業の関連で新設したものです。

J-PEAKS事業では、本学が有する強みの研究を生かし、国の研究力向上やイノベーション創出の一翼を担うことが期待されており、採択を大きな契機として、全学的な研究力の強化と社会への展開に向けた取り組みを一層加速させていかなければなりません。

本学には各研究分野で素晴らしいリソース、シーズがありますが、それを十分に生かしていくためには、研究や研究支援に携わる皆様が、これまで以上に、社会、特に地域に目を向け研究内容や成果を積極的にアピールしてほしいと切に願っております。

そのため、教育・研究・医療、さらには地域貢献活動に十分な時間を充てられる環境を整えるべく、大学業務の見直しとともに、効率化につながるDX化、さらにはAIの活用を、大学全体の最優先事項として進めてまいります。

ここで改めて、高等教育を取り巻く環境全体についても触れておきたいと思います。

文部科学省は、昨年2月の中央教育審議会の答申をもとに、「知の総和の向上」を掲げ、「質」「規模」「アクセス」に着目した高等教育政策の方向性と方策を示しています。

とりわけ「アクセス」においては、地域における高等教育の機会を確保する観点から、地方創生の推進が重視されています。

また、昨年3月に公表した国立大学協会の「我が国の将来を担う国立大学の新たな将来像」では、国立大学が地域とともに歩み、地域貢献を果たしていくことの重要性が示されています。

こうした国の方針や社会の要請を踏まえ、本学は、山梨県唯一の国立大学として、地域が抱える課題の解決に主体的に関わり、地域を牽引していける存在でなければならぬと強く考えています。

これはまさに、地方に立地する国立大学が果たすべき本来の役割であり、使命であると私は受け止めています。

その実現に向けて、本学では「地域と、未来を創る大学へ。」をキャッチフレーズとする三か年計画に取り組むこととしています。

具体的には、2年後の令和10年度に、学部相当の文理融合型の教育組織として、仮称ではありますが、「社会デザインサイエンス学環」を設置する予定であります。

これに先立って令和9年度には、学外者と協働する常設の組織として、現在甲府東キャンパスに建設中の共創環境棟の中に、仮称「地域研究教育連携推進機構」を設置し、産官学金による連携を通じた地域活性化を推進する役割の中心を担うこととなります。

いま申し上げた、9年・10年度の計画を実現するために、今年(令和8年)は、4月に学内組織である「やまなし地域共創推進機構」を設置し、地方創生や地域活性化を担う人材養成、産官学金連携の推進など、地域連携の司令塔となることを期待しています。

これらの構想の実現に向けては、教職員の皆様に忌憚のない意見を頂戴しながら、進めていきたいと考えていますので、ぜひともご協力をお願いいたします。

さて、毎年年末に清水寺で発表されるその年を表す漢字は、去年は「熊」という文字となったことは皆様の記憶に新しいと思います。

私は、山梨大学学長として、この令和8年の1年間、常に心に留め、大切にしていきたい漢字を選びました。

皆様と共有したいと思います。

それは「恕」という言葉です。(女(おんな)へんに口(くち)、下に心(こころ)と書きます。)

「恕」とは、常に相手の身になって、物事を考えるやさしさと、思いやりを意味する言葉であり、本学出身のノーベル生理学医学賞受賞者である、大村智先生から教えていただきました。

私は、本学山梨大学の学生・教員・職員の皆さん全員に「恕」の心を大切に生きてほしいと願っています。

「恕」の心とは、相手を受け入れる心、相手を許す心、相手を慮る心、そして相手を慈しむ心のことです。

大学は、学生・教員・職員それぞれが異なる立場や役割を担いながら、互いを尊重し、支え合うことで成り立っています。

私は「教職学協働」を本学のビジョンとして掲げています。

「教職学協働」とは、教員・職員・学生が、お互いに「共感」を持ち、お互いが「同調」していくことがなければ、それを実現することはできません。

相手を慮り、慈しむ心を持ち、思いやる姿勢があつてこそ、真の信頼関係が生まれ、その力が最大限に発揮されます。

私は、山梨大学の皆さんが、深い信頼の中で、今年一年、「恕」の心を共有しながら、「教・職・学」がともに歩む大学を目指してほしいと、心より願っています。

本年も、山梨大学は、教育・研究・医療を通じて社会に貢献する大学として、一步一步着実に歩みを進めてまいります。

私自身も、皆さまの声にしっかりと耳を傾けながら、誠心誠意その責任を全うする決意であります。

本学がさらなる飛躍を遂げるとともに、学生・教員・職員の皆さま、お一人お一人が、心豊かに健やかに過ごされる中、実り多く、希望に満ちた一年となりますことを心底より祈念いたしまして、令和8年年頭のご挨拶といたします。

皆様、今年もどうぞよろしく願いいたします。

令和8年1月5日

山梨大学学長 中村 和彦